

平成30年度「行動・実践目標シート」分析結果（後期）

■ 改訂のポイント

今年度の前期評価シートは、昨年度末の学校評議員会での以下の提言(4項目)をふまえ、大きく改訂する形で実施した。

- 1 大項目を3つあげる
- 2 大項目を踏まえ、評価の観点(思考)を具体化する
- 3 評価の観点から、さらに行動指針を具体化する
- 4 質問項目は、各項目10個以内に集約する

前期評価を受けた学校評議員会(H30.10.22)において、以下の提言が追加されたことをふまえ、前期の評価シートにさらなる改訂を加える形で後期の学校評価を実施した。(ただし、提言6項目中「5 子どもたちの変化の数値化」については、評価項目の設定に至っていない。)

- 1 経営方針と評価項目の相関を見える化する
- 2 具体的な評価指針(行動指標)を提示する
- 3 高校と特支との連携を強調する
- 4 横のつながり(事象に対する複数部署の関わり)を具体的に示す

▲5 子どもたちの変化を数値化したい

- 6 全てを均等に評価するのではなく、目標達成に沿った評価をおこなう

■ 前期との比較(おおむね対応する項目について)

I 理念・経営方針・重点方針	後期	前期	増減
学校の理念、及び基本方針の理解	3.1	3.2	△ 0.1
所属部・年次の経営目標の理解	3.2	3.4	△ 0.2
勤務時間の適正化への理解	3.1	3.2	△ 0.1
教員としての資質向上	3.2	-	-
危機管理への理解	3.1	3.3	△ 0.2
関係機関との連携	3.0	2.9	0.1
II 魅力ある学校・特色ある学校への取組	後期	前期	増減
授業規律の確保	3.1	3.2	△ 0.1
授業力の向上	3.0	3.2	△ 0.2
特別支援教育への理解	2.9	2.8	0.1
「共生社会と人間」の運営	2.8	-	-
「交流及び共同学習」の運営	2.9	-	-
両校の取り組みの発信	2.6	2.9	△ 0.3
III 自尊感情の醸成	後期	前期	増減
学習意欲の喚起	3.3	3.1	0.2
部活動の充実	3.0	3.2	△ 0.2
カウンセリングマインドの視点	3.3	3.2	0.1
誇りを持たせる取組	3.3	3.5	△ 0.2
生徒会活動への理解と支援	2.8	2.9	△ 0.1
地域貢献・ボランティア活動への理解と支援	2.7	3.0	△ 0.3

・大項目は変わらないものの、個々の項目には変更があり、一部には前期にはなかった項目も追加された。全体として項目の数は「目標達成に沿った評価をおこなう」観点から24から18に削減した。

・「具体的な評価指針(行動指標)」を提示するにあたり、各項目ごとにかなり踏み込んだ表現に改めている。

・大項目全体の評価平均は

I 理念・経営・重点方針

前) 3.2 → 後) 3.1 △0.1

II 特色ある学校

前) 3.0 → 後) 2.9 △0.1

III 自尊感情の醸成

前) 3.1 → 後) 3.1 ± 0

■ 評価と課題

全体的にポイントを下げた要因として、「具体的な評価指針(行動指標)の提示」が求められたことが考えられる。「勤務時間の適正化への理解」($\Delta 0.1$ pt)を例に挙げると、前期の行動・実践目標が「超過勤務の削減に努力している」であるのに対して、後期は「水・金曜日はおおむね定時に退勤している」と、より踏み込んだ表現に変わった。実践目標に対する行動指標のあくまで一例であるとはされているが、こうした具体的な提示が評価に対する心理的なハードルを高めている部分はあったと考えられる。ポイントの下落がほぼ全項目にまんべんなく起きたことで、結果として項目毎の差異(凹凸)は前期と大差はなかった。

1 「理念・経営方針・重点方針」について

3つの大項目のうち、唯一個々の項目のすべてが3.0ptを上回った。「先生方の取組が部・年次の経営目標を踏まえた実践であること」は、前期の分析でも指摘されているとおりである。めざすべき方向性、ビジョンが共有されているという点では、組織の風通しの良さを示す数値であるといえる。

前期では2.9ptだった⑥「コーディネーター・キャンパスカウンセラー・外部関係機関(警察・消防・病院・SSW・福祉支援員等)との連携(情報共有)」は、3.0ptと改善された。

2 「魅力ある学校・特色ある学校への取組」について

前期と同じく3つの大項目のうち最も低い評価となり、今回は大項目全体の評価平均が3.0ptを割り込んだ。押し下げの要因は特別支援学校との連携に関する部分に厳しい自己評価が多かったこと。具体的な行動指標のなかに特別支援学校との連携を提示した項目③から⑥までは軒並み3.0ptを下回った。職員室、あるいは必要に応じた外部機関等との連携については自信を持っている反面、特別支援学校との様々な連携には課題を感じている先生が多いという像が浮かび上がってくる。日常の授業レベルで連携が進められている「交流及び共同学習」の状況を共有する推進委員会の内容を、各教科内の各員にも周知してほしい。

⑥「高校・特別支援学校両校の取り組みの発信」は、 $\Delta 0.3$ ptと大きく評価を下げた。本校の取り組みは様々な機会に様々なチャンネルで発信されているが、実際それらの業務を多くの先生と生徒でシェアしているわけではない。実務上の必要から生じる偏りかもしれないが、そのあたりが多くの先生にとって、「関わっていない感」を生じさせている部分があるかもしれない。同じく大きく評価を下げた3_⑥「高校生ふるさと地域貢献活動・ボランティア活動等への理解と支援」や、担当部署、生徒が固定されてしまいがちな3_⑤「生徒会活動への理解と支援」といった項目の回答にも、似た傾向が見られる。休日等に係るケースも多い地域貢献・ボランティア活動の実態を伝え、生徒・職員間で共有する仕組みを考えるなど、学校を代表して外部に出ていく生徒たちを、担当外からも理解し、支援する形を柔軟に考えていきたい。また、こうした業務に関する評価については、項目の表現を一考する必要もあると考えられる。

3 「自尊感情の醸成」について

項目①から④の評価は、きわめて高い数値となった。授業改善、直接的な生徒対応については、多くの先生が自信を持っているようである。平素からの取り組み、研修の積み上げ等、実践に裏打ちされた評価といえる。

4 まとめ

風通しの良い職場環境の中で、充実感を持って目の前の生徒が抱える多様な課題に向き合いながらも、「近くて遠い特別支援学校」との連携を高めていく必要を感じている、といった全体像が読み取れる。「両校がともに助け合う」姿は阪神昆陽のアイデンティティーに直結するものであり、そのような設立の理念をきちんと共有できているからこそその問題意識であるともいえる。評価を受け、改善に向けた誠実な取り組みが期待される。

理念

阪神昆陽の両校がともに助け合って生きていくことを実践的に学ぶ機会を設定し、ふれあいを通じた豊かな人間性を育むとともに、社会におけるノーマライゼーションの理念を進展するための礎となる学校をめざす。

教育目標

- A 設置趣旨及び県がめざすべき3つの人間像を踏まえた、生徒一人一人の「生きる力」の育成（→経営方針「a」へ）
- B 併設の阪神昆陽特別支援学校との交流及び共同学習の推進（→経営方針「b」へ）
- C 高校生ふるさと貢献活動事業等を活用した地域に愛される学校づくり（→経営方針「c」へ）
- D 教職員の豊かな人間性や専門性、実践的指導力の向上（→経営方針「d」へ）

学校経営方針

- a 生徒の興味・関心や、多様な学習ニーズに応じて、主体的に学ぶことができる多部制単位制高等学校として、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む。
- b 阪神昆陽特別支援学校が同一敷地に設置されたメリットを最大限に生かして交流及び共同学習を推進し、ふれあいを通じた豊かな人間性を育むとともに、社会におけるノーマライゼーションの理念を進展する礎となる学校をめざす。また、両校の実践を県内のみならず全国へ発信する。
- c 学校評議員制度や高校生ふるさと貢献活動事業、特別支援学校交流・体験チャレンジ事業などを活用して、伊丹市池尻地区や尼崎市西昆陽地区など、学校周辺の地域と連携した教育活動を推進し、地域に開かれた、地域に愛される学校をめざす。
- d 「教育は人なり」という言葉があるように、両校の教職員は、教育の専門家としての使命感と高い倫理性を保持し、豊かな人間性の涵養に努める。また、専門性と実践的指導力の向上や、社会の変化に対応した教育観を培うことをめざして、研究と修養に努める。

評価点：十分できている=4、おおむねできている=3、あまりできていない=2、できていない=1

* 行動指標として複数の具体例を示しています。その一つ一つに当てはまるか否かではなく、指標を参考にして実践目標に対する自己評価を総合的にご判断ください。

	評価の観点	実践目標	No.	行動指標	関係する教育目標	自己評価	
I 理念・ 経営方針・ 重点方針	円滑な学校運営	学校の理念、及び基本方針を理解している。	①	・自分の業務を、学校の理念・方針の中に位置づけることができている。 ・学校の理念・方針をふまえたうえで、学習活動のねらいを生徒にきちんと説明できる。	A、B C、D	3.1	
		自分が所属している部・年次の経営目標を理解している。	②	・自分の業務を、部・年次の目標・方針の中に位置づけることができている。 ・部・年次の目標をふまえたうえで、学習活動のねらいを生徒にきちんと説明できる。	A、B C、D	3.2	
	勤務時間の適正化・ 教員としての資質向上	勤務時間の適正化を理解している。	校務・業務の適正化により、超過勤務の縮減に努力する。	③	・業務改善研修等を活かして、会議や作業の効率化に取り組んでいる。 ・水・金曜日はおおむね定時に退勤している。	D	3.1
		人間性と教育観の涵養に努め、教員としての資質向上を図っている。	豊かな人間性の涵養、専門性と実践的指導力の向上、社会の変化に対応した教育観を培うことをめざし研究と修養に努める。	④	専門性を高める研究、ボランティア、読書、スポーツ、旅行など、人間性を豊かにし、資質向上につながる時間を作っている。	D	3.2
	危機管理体制の整備	本校の危機管理体制、いじめ防止基本方針を理解している。	基本的な考え方・指導体制、組織的対応・重大事態の対応ができる。	⑤	・危機管理マニュアルが適切に保管され、自分の関係する部分はおおむね理解できている。 ・いじめが認知された際、基本方針に沿った対応ができる。	D	3.1
		日頃より関係機関との連携を密にし、様々な危機に対応できる体制を整えている。	コーディネーター・キャンパスカウンセラー・外部関係機関（警察・消防・病院・SSW・福祉支援員等）との連携ができる。	⑥	特別な支援、あるいは指導を要するケースについて、関係職員との情報共有(報連相)を心掛けている。	A、B	3.0

Ⅱ 魅力ある学校・特色ある学校への取組	授業	授業規律の確保に努めている。	落ち着いた授業を行うため、ルールやマナーを生徒に周知徹底させる。	①	・必ずその場で指導している。 ・ルールについてきちんと説明し、その通りに運用している。	A、B D	3.1
		授業力の向上に努めている。	分かる授業、分りやすい授業の構築を基礎に、問題を見出し解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び等の視点で授業を行う。	②	・「主体的、対話的で深い学び」につながる学習活動をおこなっている。 ・UDの考え方を活かした授業の工夫を実践している。	A、B D	3.0
	通級・レジリエンス	特別な支援を要する生徒に対する本校の取り組みを理解している。	通級による指導、自殺防止の取り組み等を理解し、実践する。	③	・高校における特別な支援の必要性を理解し、研修を活用している。 ・特別支援学校と連携し、困難さを感じている生徒に対する支援に取り組んでいる。	A、B C	2.9
	特別支援学校との連携	学校設定教科「共生社会と人間」を適切に実施している。	ノーマライゼーションの進展に寄与する人間観・社会観を醸成する。	④	・特別支援学校、地域の人材を積極的に講師に招き、様々な視点から学ぶ機会を設定している。 ・外部機関と連携して授業を進め、実社会で学ぶ機会を設定している。	A、B C	2.8
		交流及び共同学習を適切に実施している。	授業、行事等、学校教育活動の様々な場面で、両校の生徒がともに活動する機会を設定する。	⑤	共同の学習活動に向け、両校の担当者が定期的な打ち合わせ、情報共有をおこなっている。	A、B C	2.9
		高校・特別支援学校両校の取り組みを発信している。	両校の実践を県内のみならず全国へ発信する。	⑥	両校の実践について ・HPで情報を更新している。 ・SPIRIT等の記録を作成し配布する。 ・各説明会等で、両校の取り組みの内容を紹介する。	A、B C	2.6
Ⅲ 自尊感情の醸成	自己効力感	生徒の多様な能力・適正・興味に即し、自ら学ぶ学習意欲を喚起している。	生徒一人一人の学習状況に応じた指導を行うとともに、必要に応じて補習、個別指導等を実施する。	①	・年次、進路指導部や部顧問とも生徒情報を共有し指導にあたっている。 ・生徒が意欲的になるような授業の工夫や研究に努めている。	A、B	3.3
		部活動を充実させようと努力している。	部活動の意義を理解し、生徒の活動を支援する。	②	・「いきいき運動部活動(4訂版)」をふまえて活動をおこなっている。 ・生徒の主体性、自主性を尊重した部運営を心掛けている。	A、B	3.0
	自己肯定感	カウンセリングマインドの視点を活かす指導で生徒や保護者対応を行っている。	他の教員と、本校の生徒指導について共通理解し、同一歩調で指導にあたる。	③	・生徒・保護者の話を丁寧に聞くように意識している。 ・生徒を否定したり、自説を押しつけたりしないように意識している。	A、B	3.3
		生徒に誇りを持たせるような取組を行っている。	生徒の長所を見つけようと努力する。	④	・生徒の良い面、成果を褒める声かけを意識しておこなっている。 ・通信などを通し、生徒の良い面、成果を積極的に広報している。	A、B	3.3
	自己有用感	生徒の自己有用感を高める諸活動の内容を理解し、その取り組みを支援する。	生徒会活動を理解し、その活動を支援する。	⑤	生徒会活動について ・活動内容を理解している。 ・当該生徒の取り組みを支援したり、他の生徒を啓発したりしている。	A、C	2.8
		生徒の自己有用感を高める諸活動の内容を理解し、その取り組みを支援する。	高校生ふるさと地域貢献活動、ボランティア活動等を理解し、その活動を支援する。	⑥	地域貢献活動、ボランティア活動等について ・活動内容を理解している。 ・当該生徒の取り組みを支援したり、他の生徒を啓発したりしている。	A、C	2.7

学校評議員会を受けた改訂のポイント

- 1 経営方針と評価項目の相関を見える化する
- 2 具体的な評価指針(行動指針)を提示する
- 3 高校と特支との連携を強調する
- 4 横のつながり(事象に対する複数部署の関わり)を具体的に示す
- △5 子供たちの変化を数値化したい
- 6 全てを均等に評価するのではなく、目標達成に沿った評価をおこなう